

ドキュメンタリー映像作家・
映画監督
柴田 昌平さん

問題提起でもユートピア賛美でもない「百姓の百の声」を記録する

「人間とは何者?」を
問い合わせ続けるのが
ドキュメンタリー

森や海・川の名手・名人たちに、4人の高校生が悪戦苦闘しながら聞き取りする姿を追った『森聞き』(2011年)をはじめ、数々のドキュメンタリー作品を世に送り出してきた柴田昌平さん。その柴田さんは20歳の時にその後の人生を決めた出会いがある。

文化人類学を専攻していた大学時代、友人に「面白い映画をやっているから」と誘われて観たのが『イヨマンテー熊おくり』(1977年)というドキュメンタリー作品

だった。アイヌの人たちにとつて熊は、重要な狩猟対象であるとともに、毛皮や肉をもたらしてくれる神(カムイ)である。その魂を送り返すまでの一連の儀式を、作為なく淡々と記録する内容に、一つひとつの行為に宿る精神性を感じ「映像ってすごい」と初めて思ったのだという。

それを監督していたのが、のちに柴田さんの師匠となる故姫田忠義さん(民族文化映像研究所名誉所長、以下、民映研)だった。

「ドキュメンタリーって『人間という、この不思議な生き者って何?』という問い合わせが、いつも最後にあると思う。姫田さんの作品に

は明解な解説はないけれど、観る側に問い合わせる側に投げかけてくれる、そんな感じがしたんです」

それからというもの、民映研の事務所での上映会に毎週通い詰め、当時のほぼ全作品を観終わる頃には、映像を見る側から撮る側へと、進路を定めることになった。

『背中の見える人になりなさい』

就職して入局したNHKで、最初の赴任地となつたのが沖縄。初監督作品となる『ひめゆり』(2006年)を撮るなど、柴田さんに

とつて所縁の土地となる場所だが、そこでも忘れられない出会いをする。それは家探しをする途上で偶然知り合つた、吉堅美佐子さん(ミサ姉)。家族のようにつきあうなかで、「昌平は、ほんとにわかるね」と何度も言われながらも、仕事のこと、人生のこと、地元の人にしかわからない沖縄のこと……豊かな助言をもらう存

在となつていつた。

ミサ姉から言われた「背中の見える人になりなさい」という言葉は、当初、よく意味がわからなかつたが、「自分が何を背負つている人間なのか、どんなことをしてきたのか。自分の背後も含めて相手に伝えない限り、本当のことは聞けない」ものだと、取材経験を積みながら実感していくたといふ。



耳慣れない「百姓国」の言葉に悪戦苦闘

そんな柴田さんは今、最新作『百姓の声』の公開を今年11月に控えている。30年来の夢だったと「農への理解を『点から面』として深めていくこと」を形にして、柴田が、製作していた4年間は、悪戦苦闘の連続だったという。

「まず農家の使つている言葉がわからない。たとえば天敵という言葉は知つても、『コロナ禍で海外からの天敵輸入が滞り、土着天敵が重要になる』という話に、

技術、生きかたを、なるべく等身大に浮かび上がらせるのには、多様な農家を訪ね、農の輪郭をできるだけ大きく描く必要があつたんです」

「どんなところにも問題はあるけど、それが解決したらすぐ次に問題が起き、映像にしてもすぐ古くなってしまう。だけど僕が観たいのは、いろいろな問題を剥がしてた奥にある、もっと本質的で変わらないもの。それを発見したいし、映像にしたい。姫田さんからも『たのまでは、彼らの『復元力(レジリエンシー)』でした。できること

な』とずっと言ってきたことが、この映画づくりにも反映されていると思います」

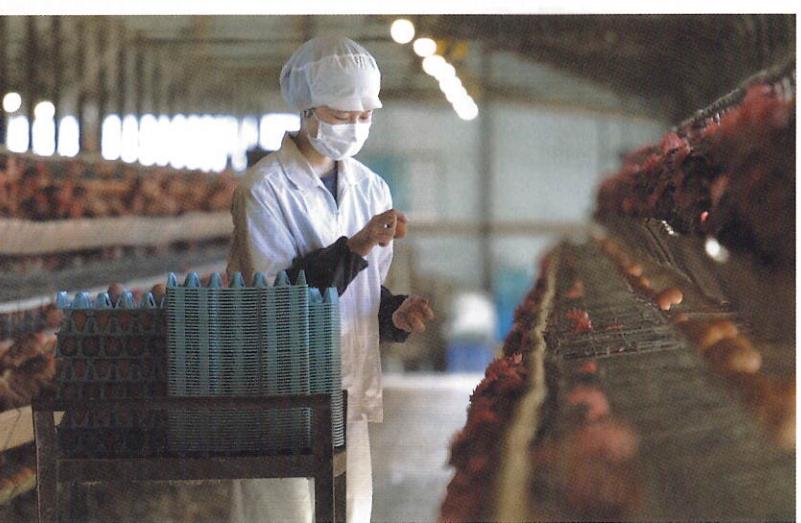
かけがえのない時間の厚みを日々「記録する」

最後に、読者に向けてのメッセージをうかがつた。

『百姓の百の声』の製作中にたくさんの農家と出会つて一番感じたのは、彼らの『復元力(レジリエンシー)』でした。できること

は何でも自分でやる、困つた時にはいろいろ知恵を出して乗り越える。それを支えているのは、統計データといった数値上の結果だけでは見えない、日々の『記録』です。

栽培のしかたや畑のつくりかたなどは本来、奥深いもので一朝一夕ではとても身につかない。現場での観察を積み重ねた時間の厚みを、農業系高校のみなさんは一番感じられる場所にいるのだと思います。せつかく恵まれた場所にいるのだから、それを存分に味わう時間を過ごしてほしいですね」



地域で鶏糞をつかつた循環型農業を営む秋川牧園



シャインマスカットを栽培する若き農家、深谷聰さん



土着天敵を使つてミニトマトを殺虫剤ほぼゼロで栽培する清友健二さん

柴田さんの最新映画

『百姓の百の声』(2022年)

2018年から撮影を開始し、全国の農家の知恵を記録した、今までになかったドキュメンタリー。2022年11月5日~ボレボレ東中野(東京)、ほか全国で順次公開。この映画は「観たら終わりにせず、柴田監督が全国行脚。上映を通して、地域の人と農家が対話し、未来について語り合う交流会実現のためのクラウドファンディングも行っています。学校などでの「自主上映会」(有料)の希望も隨時受け付け中!

www.100sho.info

問い合わせ先: プロダクション・エイシア
info@asia-documentary.com